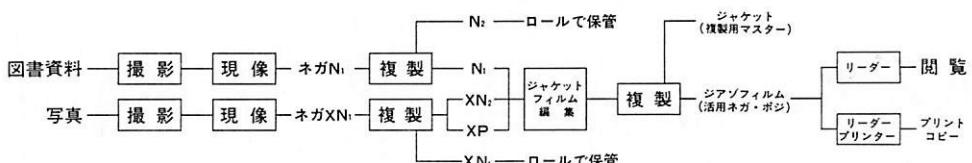


## 埋蔵文化財センターの情報処理活動

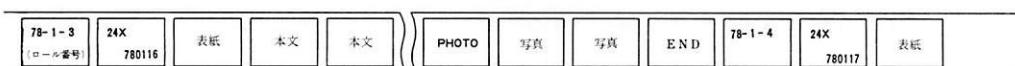
埋蔵文化財センター

埋蔵文化財関係図書資料のマイクロフィルム化 埋蔵文化財関係図書資料の刊行数は年々増加し、その収集と管理・活用のシステム化は急務となっており、当センターでは、1977年度から調査報告書等のマイクロフィルム化を始めている。埋文関係図書のマイクロフィルム化は、原本の保全・忠実な複写を主目的とし、資料収納空間の節約・資料の半永久的保存と簡便な活用をねらいとしている。マイクロシステムの概要は第1図を参照。銀塩16ミリ100フィートロールフィルムを使用し、図書ごとに与えたロール番号・撮影日・縮小率等を表示したターゲットを写し、本は見開きを1駒とし全頁を撮影する(第2図)。写真掲載頁は、別途、16ミリX線写真用フィルムに写す。現像後、オリジナルネガ( $N_1$ )から第2ネガ( $N_2$ )を銀塩のネガーネガ方式で作製しこれを保存用とする。X線フィルムについては、閲覧用のポジ(XP)も複製する。この各オリジナルネガ( $N_1 \cdot XN_1$ )とポジ(XP)とも図書ごとに編集してジャケットに入れ、マスターNEGAとする。これからジアゾ方式でフィッシュを複製し、これを活用ネガとする。活用ネガの検索については、ロール番号を検索番号とし、図書カードによる検索方法を採用している。マイクロフィルムの利用にあたっては、リーダーによる閲覧、リーダープリンターによるハードコピー化を行なっている。1978年度末現在、図書約2,500冊(フィルム140巻、ジャケット7000枚)を撮影、年間約1,700冊(フィルム約100巻)の割合で撮影している。マイクロフィルム化で問題となるのは写真頁である。現在、X線フィルムを利用しハーフトーンの再現につとめているが、ハードコピー化の段階では写真の再現度は必ずしも満足できる状態でなく、今後の技術的な課題となっている。また、フィッシュの任意の収納と迅速な検索を可能にする検索装置の導入も、将来の活発な利用に先立って、検討すべき段階に至っていると言えよう。現在、京都大学所蔵図書の一部を借用し撮影を進めているが、今後、他の諸機関の協力を得、埋文関係図書資料の収集をはかるとともに、研究所蔵書のマイクロフィルム化も進め、情報サービスの具体化を検討していく必要があろう。

(山中 敏史)



第1図



第2図

### 埋蔵文化財センターの情報処理活動

**航空写真リスト作成** 当研究所は、日本測量学会、日本写真測量学会の依頼を受け、航空測量用に撮影された航空写真原フィルムを保管している。従来各航空測量会社では、フィルム保管スペースの不足という理由で、撮影年度の古い順に廃棄処分をしていた。しかしながら、これ等昭和30年代に撮影された航空写真は開発前の国土の様相をよくとらえ、考古学・歴史地理学にとどまらず、防災・交通工学などの分野からも保存の要望があった。この原フィルムは一種の文化財であるという観点から、比較的保管場所に余裕のある当研究所が保管の要請を受けたものである。しかし、このフィルムを利用するには、どの範囲がどういうデータで撮影されているかが容易にわからなければならない。このための整理の第一段階として、各会社が作成したいいろいろな様式・縮尺の標定図を、国土地理院発行の1/20万地勢図を基準として統一した規格にプロットしなおす作業をおこなった。さらにそれを、8×8のメッシュに分割しコードを付した。これが今年度作成したフィルムリストⅡである。これは先年発行したフィルムリストⅠにつづくものであり、リストⅠ・Ⅱをあわせると現在保管中のフィルムのほぼ $\frac{2}{3}$ がリストアップされたことになる。

現在の保管数は約5,300件、3,000缶で、おおよそ40万駒になる。この膨大な資料を生かすべく第1次リスト作成につづき、マイクロフィルム・コピー作成など、検索システムを充実させる事が今後の課題である。  
(伊東 太作)

**遺跡に関する情報の処理・活用システムの研究** 上に説明したような情報収集・整理の業務と併行して、センターでは遺跡関係の情報システムについての研究を継続的にすすめてきた。この研究は一つには、コンピュータを利用する情報の整理・活用システムを実現していく上での細部にわたる技術的な諸問題を明らかにし、できる限り解決をはかる目的としているが、同時に情報資料の蓄積・整理の仕事と、いくつかの実験的な研究作業を通じて、埋蔵文化財がおかれている社会的な現状の中で、情報利用のシステムの果しうる役割、システムがもつべき規模や構造、将来的な可能性等についての基礎的な検討も重要な課題とするものである。情報活用システムに必要となるシソーラス作成のための考古学関係用語抽出と分析の作業は、処理プログラムを改良しながら資料の数を増やし、現在約3万5千の用語のカード化と分類が終った段階にある。この仕事と関連して大型電算機の漢字処理能力を利用する文献整理の研究の一つとして和名類聚抄の地名を入力して、頭字と第2字の部首画数順および音読順の4通りの配列で出力し、これに呼称の50音順のリストを加えた索引を作成する実験をおこなった。成果の一部は「古代郡郷里駅名索引稿」として既に刊行済みである。また直接に遺跡遺物にかかる資料の組織化と検索の研究作業として、平城宮出土の軒瓦約2万5千の拓本カードの記載事項の入力の実験もすすめている。これについては各種の用語の整理、特に遺物の出土層位の記述の全体としての関連づけがさらに必要であり、処理結果の出力形式についても幾つか問題があるので、整理検討の作業を行っている。  
(岩本 圭輔)